



グローバル経済と闘う女性たち

南出 和余
神戸女学院大学准教授

二〇二〇年三月に開催された第一五回大阪アジア映画祭で上映された本作は、 Bangladesh シュ出身の女性監督ルバイヤット・ホセイン（一九八〇〜）の脚本・監督によって、アパレル生産工場で働く女性たちの闘いを描いている。



「メイド・イン・Bangladesh」のワンシーン（提供：ルバイヤット・ホセイン）

映画の舞台は世界の大手アパレル工場が立ち並ぶ Bangladesh 首都ダッカ。二三歳の主人公シムは縫製工場に働いている。過酷な労働状況、安全性を欠く工場設備、低賃金なうえにきちんと支払われない給与、それでも他に就ける仕事がなく葛藤しながらも働き続けなければならぬ毎日のなかで、シムは労働組合の立ち上げを決意する。経営者からの脅しや家族の反対にもめげず、同僚たち

の署名を集め、労務省に掛け合い奮闘する。衣装や言葉遣いに示される格差、それを互いに感じつつも階層を超えて助け合う女性たち、埃まみれのダッカの街と電力不足で暗い部屋に「際映える色鮮やかな彼女たちの衣装が、Bangladesh のリアリティを示す。

女性たちの抵抗

映画に出てくる女性たちは、Bangladesh の急速な経済成長を支える主要労働力であるだけでなく、世界のアパレル産業を担っている。現在 Bangladesh は中国に次ぐ世界第二位の輸外型既製服生産国で、ファストファッションをはじめ世界の主要アパレルブランドが彼女たちの「豊富で安価な労働力」に頼っている。映画のワンシーンに、シムが一日に縫うTシャツは一六五〇枚、そのTシャツが海外の店頭と並ぶとき、わずか二、三枚の値段が彼女の月収に相当するという印象的な会話がある。この不均衡な経済システムのもとでの搾取は、日本で暮らすわたしたちにも無縁ではない。「Made in Bangladesh」は、今わたしたちが日々纏う衣類に刻まれており、彼女たちの闘いの矛先は、わたしたちにも向けられている。

しかし映画は彼女たちを決して「無力な犠牲者」には描いていない。状況を憂えながらも強い感情と思いを

やりによって団結し、抵抗する姿は圧倒的で頼もしい。ルバイヤット監督は、この映画は「女性の抵抗」を描くと同時に、ムスリム女性に対する犠牲者というステレオタイプを壊すものであるという。事実、この映画の舞台となった二〇一三年を節目に、Bangladesh のアパレル産業は、彼女たちの抵抗と行動によって大きく変化している。

「ラナ・プラザ崩落事故」のその後

映画は実在する人物ダリヤ・アクター・ドリ氏の実話に基づいている。冒頭で述べた大阪アジア映画祭で、映画祭と神戸女学院大学文学部英文学科との共催によるシンポジウム『メイド・イン・Bangladesh』を考へる」を開催し、ダリヤ氏とのトークセッションをおこなった。ダリヤ氏が組合を立ち上げるべく奮闘したのは二〇一三年二月から四月のことである。この二カ月の闘いのあいだの四月二四日に、ダッカでは「ラナ・プラザ崩落事故」が起きた。縫製工場がひしめきあうビルの崩壊によって、二二〇〇人以上の労働者が死亡、約二五〇〇人が負傷した。ラナ・プラザ崩落事故は世界のアパレル産業の大惨事として問題を露呈するとともに、彼女たちの労働運動を活発化させた。以降、発注する側の多国籍企業は、工場の施工条件や最低賃金の確保などコンプライアンスを強化した。



ダッカの一角にある複数の縫製工場が入るビル（2018年）

しかしこのことで、工場に働く女性たちの状況が改善された訳ではない。映画の主人公シム、実在のダリヤ氏が働いていた工場は、施工条件を満たせず数年後には閉鎖に追いやられ、彼女を含む多くの労働者は仕事を失った。彼女は労働者の代表として工場経営者とともに、改善のための猶予期間や労働確保を多国籍企業に懇願したが応じてもらえなかった。組合活動をやっていた彼女たちは他の工場でもなかなか雇ってもらえない。そして現在、世界のアパレル産業は、労働環境が改善されつつある Bangladesh シュからヨルダンなど他国へと工場を移転しつつある。しかしそこで働くのは、ダッカで仕事を失い、海外出稼ぎ労働者として Bangladesh シュからきた女性たちである。異国の地で働く彼女たちは、ダッカで働いていたときのような労働組合からのサポートも得られないまま、さらに過酷な労働状況を強いられるという。

この世界のアパレル産業の歴史的負の連鎖はいつまで続くのだろうか。グローバル経済の先端にいる消費者のわたしたちが、そろそろ立ち上がるときを迎えているのかもしれない。



ダッカの縫製工場で行なっている作業をする女性たち（2012年）